

遠刈田温泉での湯治

結婚した翌年の秋南方出漁後の休暇に、二人して遠刈田温泉佐藤源兵衛旅館に一週間程湯治に行った。

出航すれば約半年は会えない。暫くぶりの逢瀬である、蒲団、炊事道具、食料など持ち込みで、一室を借り切り風呂に入っては、ゴロゴロ、真の休養であった。

妻は私が出航している間は、生家で農作業を手伝っている。農作業はきつい。一年中休みは殆どない、休みらしい休みと云えば、正月少しと、お盆ぐらい、朝早くから夜なべ迄、昔はよく働いた。何処の家も同じ、その様に働かなければ、暮らしていけない時代だった。

私の父文一郎は妻の父と懇意で、時々妻の生家矢附に行く。妻は白石女子校に通学していたが、帰ってくると、すぐ制服を脱ぎ、着替え農作業に行く。その姿に父は感心し私の嫁にと、考えていたそうだった。私も大洋漁業に転船し収入も増え、結婚しても生活出来ると、考え仲人を介し、縁談が成立した。

あの当時進学するのは、級で二、三人位、私の級でも高等小学校二年六十何人のうち一割位だった。私は悪い成績でも無いのに進学させられず、通学している同級生を見ると口惜しい思いだった。

妻もいい骨休み（休養）だった。部屋で休んでいると、隣の部屋に野菜などの行商のオバサンが来て、しつこく品物を勧めている。今度は此方に来る、来られては迷惑だ。撃退する方法を考えた。すばやく蒲団を敷き二人して蒲団を被り寝たふりしている。

行商のオバサンは部屋の前で「こんにちは」と云うか云わないうちに、障子を開ける。目の前に若い二人が寝ている、「あつ」と声を出し障子を閉め、退散して行く。一度だけだったが、湯治中二度と来なかった。

私が二十八才、なかは二十一才、初冬の忘れられない思い出である。